



宮崎七湖著

人文系大学院留学生の文章課題 遂行過程における管理プロセス

早稲田大学出版部、2012年発行、302p.

ISBN : 978-4-657-12524-8

毛利 貴美

1. はじめに

本書は、早稲田大学に提出された学位論文「人文系大学院留学生の文章課題遂行過程における管理プロセス」（2009年9月博士号授与）をもとに刊行された。

外国人留学生は、その言語や環境、様々な事項からの影響による障害を克服する道を見つけ出すという（Naiman et al. 1978）。その「障害を克服をする道」とは、大学・大学院での講義や研究における論文執筆などの専門分野に関わる領域、つまり、アカデミックな領域における問題を解決するための方略であろう。それでは、日本の大学や大学院に在籍する留学生は、実際にどのようなプロセスを経て、その道を見つけているのであろうか。

現在の日本の大学や大学院などの高等教育機関では、英語プログラム等の日本語能力を問わない課程以外では、留学生は日本人学生と同様に、レポートや論文や記述試験が課せられ、評価されている。そのため、文章課題を作成する能力が留学生の成績に大きく影響するといっても過言ではなく、その点で、日本語教育の研究分野においても、アカデミック・ライティング能力の習得に関わる研究の発展が早急に望まれる。しかしながら、著者が指摘するように、近年、第二言語としての日本語の文章産出過程についての研究は、トピックが設定された文章産出過程についての研究はあっても、日本の大学や大学院に在籍する留学生が、実際の課題を提出するまでの過程で、どのように文章課題を遂行しているのかという研究はこれまでなく、その点で、留学生個人の実際の行動、留学生を取り巻く社会や文化の文脈とは切り離されているといえよう。そのため、著者は、日本の大学院に在籍する留学生が、実際に専門科目を履修する中で、どのような文章課題に取り組んでいるか、そして、文章課題遂行過程でどのような問題を抱え、どのように問題を解決しているかという検証を目的とし、従来になかった研究アプローチを採用し、実態調査を行っている。留学生が学術的文章を書き進めるプロセスを注視し、観察する過程で見えてきた実態と、緻密な分析を経た考察から、著者の教育研究者としての熱意と態度が伝わる書である。

2. 本書の内容

2.1 序論

第1章の序論では、著者本人が英語によるアカデミック・ライティングで経験した、学術目的のための文章課題を遂行することの困難さや留学生の増加、学習の多様化という背景から、(1) 人文系大学院では、どのような文章課題が課されているのか、(2) 人文系大学院に在籍する留学生は、文章課題を遂行する過程でどのような逸脱を留意し、それを評価し、調整を選択、遂行しているのか、(3) 人文系大学院に在籍する留学生は、どのように文章課題遂行能力を習得しているのかを明らかにするという目的を示し、研究の動機となった問題意識を明確にしている。

本研究では、アカデミック・ライティングの“プロセス”に焦点が当てられ、二つの中心的な理論的枠組みを援用している。その一つ、「アカデミック・インターアクション」(ネウストブニー2003)は、接触場面での最良の行動を支援し、相互行動のプロセスの中で管理プロセスが行われ、より広範なアプローチが採用されることを前提とし、その能力には、「文法能力」だけでなく、「文法外コミュニケーション能力」、「社会文化能力」を含まれる。更に、もう一つの枠組みとして、文章産出過程の分析には「言語管理理論」(ネウストブニー1997)を援用し、留学生が文章課題を遂行する過程で起こる、規範からの逸脱、逸脱の留意、逸脱の評価、調整の選択、調整の遂行という管理プロセスを質的に分析し、この管理プロセスにおける調整行動遂行の実態を明らかにしている。

本書では、大学における文章課題に実際に留学生が取り組み、文章課題を遂行するミクロ的なプロセス、そして、長期間にわたる縦断的な調査によるマクロ的なプロセスというプロセスを複合的に分析する上で、これら二つの理論を研究の二本柱とした結果、円滑な理論の展開の基盤として随所で筆者の主張の妥当性、信頼性を支持する内容となっている。

2.2 先行研究

第2章では、ライティングに関する先行研究の領域を三つに分けて述べている。一つ目の領域は、英語教育の分野において、L2としてのライティングと学術目的のための文章の研究がどのように発展し、現在に至ったのかについての研究である。この英語のアカデミック・ライティングの研究には、社会的な側面をも考慮に入れた学術目的の文章の産出プロセスを探るため、留学生が実際に高等教育機関で科目を履修し、文章課題を遂行していく過程が特徴としてあった。一方、二つ目の領域における、日本語の文章産出過程についての先行研究では、プロセス・アプローチによる文章産出過程の研究において、書き手の認知的側面に対する研究が中心で、どのような状況で、誰に向けて、何のためにその文章が書かれているかといった社会的な側面への視点が弱いことを著者は指摘している。更に、三つ目の領域である、日本語教育の分野で行われた学術目的のための文章・文章表現教育の研究では、これまで言語的特徴を探る研究や、実験的な文章産出プロセスの研究、留学生や教員への質問紙による調査・研究が多く、著者はこれら従来の研究方法の問題点を挙げ、研究アプローチの転換の必要性について言及している。

2.3 調査の方法

第3章では、第2章において指摘された方法論の問題を踏まえ、本研究の調査についてのデザインが示され、調査の方法と課題の種類が述べられている。まず、調査対象者は、人文系大学院の日本語教育学を専門分野とする研究科に在籍する留学生10名で、全員が専門科目である「科目A」を履修していた。データ収集は、研究科の前期と後期それぞれ1学期間にわたって行われた。分析の対象は、①「科目A」の文章作成課題を遂行する過程が記述された学習ダイアリー、②調査対象者に対する「科目A」ならびにその他の科目を履修する際の意識について等のインタビューの発話データ（1学期中に3-4回）、③「科目A」の参与観察を行った際のメモ、④文章課題産出途中の原稿と最終原稿、⑤④の文章産出途中の文章に対するフォローアップインタビュー、⑥「科目A」担当教員へのインタビューの発話データであった。

調査対象者が履修した大学院研究科の理論科目、11科目で課された課題の分析を行った結果、「調査・分析」、「論文要約」、「感想・質問」、「問題」の4種類の課題があり、本章では、これらの課題と講義活動との関連性が明らかになっている。

3. 研究結果の概要

3.1 社会文化行動の分析結果

第4章において著者は、本研究におけるアカデミック・インターアクション行動の一つ、社会文化行動についての分析を行っている。この社会文化行動とは、言語行動や社会言語行動のコミュニケーションを除外した社会や文化の行動を指す(ネウストプニー1999)が、分析の結果、「科目A」における「調査・分析」の課題の遂行過程において、講義を理解する上での問題に対しては、教員に相談する、教員が書いた書籍や論文を読む、他の受講生にわからないことの説明を求めるといった調整行動が遂行されていた。また、科目担当教員が課題に何を求めているかという課題要求の解釈に問題が生じた際には、調査対象者は、担当教員が書いた論文や書籍を読む、講義を理解するための調整を行うという行動が取られていた。また、課題要求の解釈上の問題に対しては、素材やトピックを選定するのに、他の受講生が行った口頭発表や、過去に行った類似の課題をモデルにするという調整行動が遂行され、この過程において他の受講生や教員の評価やコメントといったインターアクションを通じて、基準が参加者の中に形成されていったという。更には、講義を理解する、選んだ素材やトピックが適切であるかを判断するのに、人的ネットワークを利用するという調整を行っていたことが調査により明らかになっている。

3.2 文法外コミュニケーション行動と文法行動の分析結果

第5章では、「科目A」の文章課題遂行の過程で行われた文法外コミュニケーション行動、ならびに、文法行動に関する管理プロセスを分析した結果がまとめられている。

まず、文法外コミュニケーション能力に関しては、「内容」「構成」「表現」の三つに関する調整が行われ、「内容」と「構成」は、さらに全体的なもの、局所的なものに分けられた。「表現」に関する調整は、「詳細化」、「繰り返しの回避」、「緩和表現の使用」、「書き言葉の使用」、「学術用語の使用」、「長い文の回避」、「日本語らしさへの配慮」、「対人関係

への配慮」、「語彙の選択」の九つの調整が認められた。これに「全体的内容」、「局所的内容」、「全体的構成」、「局所的構成」を加えた13の調整は、三つの方向の調整「読み手への配慮による調整」「洗練された文章を目指す調整」「伝えたい内容を正しく伝えるための調整」という3種類に分類されている。

一方で、文法行動に関して、実際に調整が行われたのは助詞、自動詞／他動詞、アスペクトの三つの項目のみであり、調査対象者がより管理の意識を働かせていたのは、「文法」よりも「文法外コミュニケーション」の側面であると分析されている。

3.3 論文要約課題遂行過程の分析結果

第6章では、科目Eと科目Bで課された課題、「論文要約」の課題を取り上げ、調査対象者の課題遂行過程における管理プロセスが分析され、以下の4つにまとめられている。

第一に、論文要約の課題を遂行するのに、留学生が困難と思う側面は、文法や語彙などの文法能力よりも、何をどのように書くかという、内容と形式、つまり、文法外コミュニケーション能力の側面についての留意が多く見られた。

第二に、論文要約という課題において、どのような内容をどのように書くべきかについては、教員の要求、課題の目的や、読み手（聞き手）の状況によって、方法が異なる。

第三に、文章課題が、過去に遂行した文章課題のジャンルと類似のものであると判断した場合、以前に経験した課題のモデルがそのまま応用され、問題が生じる可能性がある。

第四に、社会文化行動や、文法外コミュニケーション行動に関しては、留学生が既に持っている経験から生じた規範が確立されているケースがあったが、その規範と既に確立された規範との衝突が起こった場合、学習者にとって新たな規範に従うのに抵抗があり、逸脱であると留意しながらも、調整を遂行しないこともある。

3.4 考察

最終章となる第7章では、本研究全体の分析結果から、(1) 課題要求を解釈する上での問題とその原因、(2) モデル使用の調整、(3) 課題遂行過程における規範と文化、の三つの観点から考察が行われている。まず、(1) については、その調整プロセスの分析から、著者は、科目担当教員側の問題に言及し、教員が課題の目的、意図、つまりは何を学ばせようとしているのか、受講生に何が求められているのかを明確に受講生に伝えることによって、課題要求の適切な解釈が行われ、事前に問題が防げると述べている。(2) のモデル使用の調整については、学習者が過去に行った類似の課題をモデルとする、または、他の受講生の口頭発表をモデルとするといった調整行動が、全ての科目の課題遂行過程において認められ、①課題要求を解釈し、素材・トピックを選定する過程、②課題に含めるべき内容を決定する過程、③形式・構成を決定する過程の三つの過程において、遂行されていたという。最後の(3) 文章課題遂行過程における規範と文化については、課題遂行過程において、学習者が課題要求を解釈する、素材やトピックを選定する、要約する論文を選定する、課題に含める内容を検討するといった調整が行われ、その調整の拠り所となる規範は、講義を受ける過程で形成され、特にクラスというディスコース・コミュニティに参加することによって、個人の中に形成されたものであると結論付けており、この点は特筆すべきである。

4. おわりに

本研究の結果は、日本語教育学や留学生教育だけでなく、日本人学生へのライティング教育など様々な分野に関連するものと思われる。その貢献や意義に関して、以下の点を指摘しておきたい。

まず、第一に、日本の大学に在籍する留学生に対して、実際に課された文章課題に取り組む過程についての実態調査を行った点である。従来の研究のように、文法や語彙などのマイクロ面に焦点を当て、実験的に調査したプロセスではなく、著者は「留学生はいかに文章を書くのか」という命題から、受講者である調査対象者が実際に直面する問題を解決していく過程を、マイクロ、マクロ両面から追っている。結果、留学生がゼミへの参加で得たレジュメの情報を取り入れるなどのマクロ面での調整が確認され、興味深い。

第二に、実態調査の結果を分析する際に、学習者個人が持つ社会的、文化的な「文脈」に着目し、課題遂行過程における新たな規範の内在化や生成、調整行動の変容を観察している点である。これは、アンケート調査などによる量的調査では現れない成果であろう。

第三に、科目担当教員側の問題に言及し、アカデミック・ライティングのプロセスにおける問題が留学生側のみにあるという位置づけとなっていない点である。日本の大学側の規範を持つ講義担当者が「ホスト (Fan 1994)」、留学生が「ゲスト」となる関係性を回避するためには、著者が指摘するように、教員側が課題要求を「どう伝えるか」、また、授業で「何を学ばせようとしているのか」を内省することが重要であるといえるだろう。

なお、本書の内容をより深く理解するための疑問点として、著者が文中で述べた、型に当てはめて書く指導を受け続けた留学生が、型を固定的に捉え、この型の存在が留学生の文章の目的、読み手や聞き手の状況といった思考を妨げているという主張に対して、筆者も含めたアカデミック・ライティングのクラスを担当する教員としては、どこまでが型を教えることになるのか、望まれるレポートの形について著者の意見を得たいと感じた。

留学生の文章課題遂行過程の実態についての研究の発展は、留学生増加が予想される日本のアカデミック領域において最重要課題であるといえる。その点で、本書の貢献と意義は大きく、日本語の文章表現教育に携わる教員だけでなく、大学や大学院における一般科目や専門科目を担当する教員にとっても示唆に富む一冊となっている。

参考文献

- Fan, S. K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13-3, 237-252.
- Naiman, N., Frohlich, M., Stern, H. & Todesco, A. (1978) *The Good Language Learner*. Research in Education Series No. 7. Toronto: Ontario Institute for Studies in Education.
- ネウストブニー, J. V. (1997) 「プロセスとしての習得研究」『阪大日本語研究』9、pp.1-15
- ネウストブニー, J. V. (1999) 「コミュニケーションとは何か」『日本語学』18-6、明治書院、pp.4-16
- ネウストブニー, J. V. (2003) 「アカデミック・インターアクションの理解にむけて」平成14年度～16年度科学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 課題番号 14208022 研究成果中間報告書『日本留学試験とアカデミックジャパニーズ』pp.139-150

(もうり たかみ 早稲田大学日本語教育研究センター)